

抗菌薬マスター戦略

非問題解決型アプローチ



監訳：岩田健太郎

著：Alan R. Hauser

B5変 頁380 図94 2008年
定価5,250円(本体5,000円+税5%)
[ISBN 978-4-89592-564-8]MEDSi刊

原著は、Alan R. Hauser M.D., Ph. D. による“Antibiotic Basics for Clinicians: Choosing the Right Antibacterial Agent”。訳者は、監訳者の岩田健太郎先生を筆頭に、感染症学を志す14名の新進気鋭の多彩な顔ぶれで、なかには、地下鉄サリン事件で名を馳せた奥村徹先生が名を連ねている。

正直なところ、古い年代の私は原著者を知らない。しかし、岩田先生その人と彼の“キレものぶり”をよく知っているのだから、若い彼が、さらなる若者達を動員して邦訳に情熱を傾けたからには、それ相当の思い入れがあるに違いないと読む前から興味津々であった。

しかし、これもまた正直にお断りすれば、いきなり目についた「非問題解決型アプローチ」というサブタイトルを私は十分理解できていない。勘ぐりの類で言えば、抗菌薬に関する「問題解決型アプローチ」が臨床末端においてこうも肥大してくると、問題→解決の「各論」はいきおい短絡的になりがち傾向を帯びてきた。そこで今一度、原著のタイトルにもある「臨床家のための Basics」という「基本」から抗菌薬を勉強し直す必要があるのだという原著者と監訳者の共鳴があったものと想像する。もしもそうであれば、「抗菌薬療法における基礎的考え方」というテーマをいつも念頭に置いてきた私にとって、内容に違いこそあれ、テーマに込められた思いに共感する次第。

さて、本書を読んでみると、確かに丁度手頃なボリュームで、図、表、イラストを多用し、読みやすく、わかりやすく工夫されているのが肌で感

じられる。才能に恵まれた原著者は、肉付けの部分の思いきり削り取りながら、質は落とさず骨子を残し、手頃な分量にまとめることに努力したのだとわかる。

セクション1は菌の簡単な分類と構造、次のセクションで各抗菌薬の効力の及ぶ菌のスペクトラムと効力を失う耐性のメカニズム、次に、判明した起因菌に対する抗菌薬選択、そしてセクション4で起因菌がわかってない段階のエンピリック治療へと続く。各セクション中の各章末尾に「問題」をマメに設けているだけでなく、さらにセクション5、6で「症例問題」、「復習問題」と、読者の記憶と理解の賦活に非常に熱心である。結構な分量のこれらの「問題」提示が決して押し付けがましくなく、理解してもらいたいという強い意思が素直に感じられる。最後に用量・その他を「付録」にまとめている。

随所に「実は！」という挿入文をちりばめている。その箇所の本文にまつわる裏話、事のきっかけなどを記しているのだが、眠気・退屈を吹き飛ばす効力大である。さらなる傑作は、セクションや章の冒頭に挿入された「戦略論」とでも言うべき歴史書から抜粋された引用文で、なかなか粋な計らいとなっている。中でも宮本武蔵の「五輪書」が最も多く4回も引用されているではないか！ すっかり嬉しくなってしまった。

細菌という難敵に対して抗菌薬という武器を上手に使うという「戦略論」には勿論賛成だが、骨子だけを残したいがために省略されてしまった「肉付け」の中から、私の念頭に浮かぶ以下の2つの事柄を、最後にあえて付記しておきたい。①セクション3、4の原因限定治療とエンピリック治療の狭間に、診断的武器として「グラム染色」を明確に位置づけたい。②細菌との「戦い」に平行して、耐性菌をはびこらせないためにどうすればよいのかを考える。その一つに、抗菌薬の広域カバーの de-escalation を模索する。civilian control の下に、果てしない「軍拡競争」に陥ることはできるだけ避けたい。